5 ✉ home@mb.kyoto-np.co.jp

早川一光 聞き書き

こんなはずじゃなかった2

第11回

医の心を教わった父の言葉

「37度の熱ぐらいで医者をよぶな」

往診に行った医者が、怒鳴りながら患者さんの家から飛び出してきた。地域医療を学びに、堀川病院に研修にきていた若い医者だった。

「熱が下がってよかったな」となぜ言えん。熱の原因は何だろうとなぜ診ない。

「医の心」を伝えるのは難しい。

僕が医者になってすぐの頃。小児科医だった親父が、ある朝僕を庭に呼び出し、「足元を這うアリをつまんでみろ」と言った。そしてそのアリを地面におろした時、アリが少しでも傷ついているような日は、診療するなと言い放った。医者として失格だと。

医者になりたての僕は、親父の意味することがようわからんかった。

親父は、医者である自分自身にも厳しかった。「子供が熱をだした」という連絡がくれば、夜中でも必ず「今から行く」と往診に行っていた。「明日、診療所に来たらいい」とは決して言わなかった。

その子どもの病状の心配と同時に、それが感染力の強い病気かもしれないという疑いを捨てなかった。診療所に来るほかの子どもたちを守る義務もあったからだ。当時は、いろんな伝染病が蔓延していたからなあ。

その後僕は、西陣の住民と一緒に、住民による住民のための医療にかかわるようになった。親父の言葉を心の片隅におきながら。

あれはとくに暑い夏やった。西陣の家には、織機がどんと陣取っている。その奥にある鞍馬の岩風呂みたいに蒸す部屋で、そのおじいさんは寝ていた。

往診に行くたび、おじいさんは僕に怒鳴る。「もう、ほっといてくれ。どうせ死ぬんやから」

でも暑さで食欲がなくなってきたある日、お盆も休まず様子をみに行く僕に、おじいさんがぽつりと言った。

「あんた、いつ休むんや」

「おじいが元気になった時や」

その瞬間、おじいさんの顔が、涙でくちゃくちゃになった。怒りしか見せなかった頑固じじいが泣いた。

それ以降、おじいさんはどんどん元気になっていった。生きようという気力がみなぎってきた。

あの時やな。「このおじいの懐の中に入れた」と僕は思った。

親父のアリの話は、常に平静な心で患者さんの立場にたち、指先に全神経を集中して診察しろという意味やったんや。

僕の「医の心」は、これが出発点でした。

（聞き手・フリーライター早川さくら）

早川家の裏玄関にはアリの巣穴がいくつもある。残暑厳しい日中も忙しそうに働いている＝撮影・松村和彦